進修同窓会々報

発　行　土浦一高進修同窓会
編集人　同窓会会報編集委員会
委員長　青山和義
印　刷　常陽新聞新社

←現在の旧本館（創立百十周年を記念してロータリーが整備された）

↓旧制中学校時代の本館イメージ
（中40回卒 木村成行氏の版画）

土浦一高校歌

堀越　晋　作詞
尾崎楠馬　作曲

一、沃野一望数百里　関八州の重鎮とて
そそり立ちたり筑波山　空の碧をさながらに
湛えて寄する漣波は　終古渝らぬ霞浦の水

二、春の弥生は桜川　其の源の香を載せて
流に浮ぶ花筏　蘆の枯葉に秋立てば
渡る雁声冴えて　湖心に澄むや月の影

三、此の山水の美を享けて　我に寛雅の度量あり
此の秀麗の気を享けて　我に至誠の精神あり
東国男児の血を享けて　我に武勇の気魄あり

四、筑波の山のいや高く　霞ケ浦のいや広く
嗚呼　桜水の旗立てて　我が校風を輝かせ
亀城一千の健男児　亀城一千の健男児

―目　次―

2面　会長あいさつ
　　学校長あいさつ
3面　平成19年度総会報告
4面　卒業50周年記念同窓会
　　卒業40周年記念同窓会
　　卒業25周年記念同窓会
　　定時制部会と総会
5面　恩師を訪ねて
6面　卒業生レポート
7面　支部だより
8面　お知らせ・紀行文
9面　母校だより
10面　職員室だより・部活動だより
11面　進路状況報告
12面　平成18年度決算報告等

同窓会会長あいさつ

平田公敏

同窓会会長に就任してから、早くも半年余りが経過致しました。

就任当初、四月の入学式に初めて会長として出席し、祝辞を述べたのですが、新入生諸君の初々しい緊張した雰囲気が会場一杯に溢れ、さすが進学校の入学式であることを同窓会々長として大変誇らしく思った次第です。

これらの入学を許可された子女達が三年間の一高生活の中で、村松校長先生以下教頭・教諭の方々の校風に副った教育と先輩在校生との交流によって成長し、卒業時には希望する大学へ進学できるという期待するものであります。

さて、その後、同窓会各支部の総会が相次いで開催され、お招きを受けて、高津天川支部・東京支部(東進会)・県庁支部等に出席させていただきました。

各支部共、同窓の皆さんが多数相集い、懇親の場で昔話に花が咲き、又一高の現況等についても色々と質問が相次ぎ、母校に対する熱い想いが伝わり感激致しました。

同窓会活動は皆さんご高承の通り会員の会費と入会金と寄附金を財源として、在校生の活動に対する経済的支援を第一義として支出し、その他会報発行、卒業周年記念品費等に充当して活動を行っています。

近年大曽根副会長を委員長とする旧本館活用委員会の活動が顕著となって、資料展示の整備や、旧本館の一般公開等々、活躍して下さる数名の委員の方々の献身的な努力によって、旧本館の整備や保存が飛躍的に進捗していることをご報告しておきます。

同窓会活動として次に挙げられるのは、在校生に対する精神的支援活動であります。

我々卒業生は直接在校生に教育の場で立合うことはありませんが進学しようとする大学の出身卒業生がその在校生に対し、精神的に手を差し延べて相談に応じたり、また部活動の顧問となって指導したり、色々な場面で在校生諸君のよき相談相手として活躍していただいている諸先輩が沢山おられます。

この他同窓会活動には卒業生の皆さんのそれぞれの社会的地位がもたらす無形の在校生支援活動がありますがこの事はまた号を変えてお話することにしましょう。

最後になりましたが、同窓会副会長を永年にわたり精励されておられる櫻井光孝副会長がその功績によって文部科学大臣賞を授賞されました。

同窓会としては大変名誉なことであり、こうした素晴らしい先輩役員の無償の奉仕によって在校生支援活動に尚弾みがつく事を期待するものであります。

会員諸兄の益々のご健勝を願い本校校長以下教職員の皆さんのご活躍を期待してごあいさつと致します。

「同窓会会報に寄せて」

学校長　村松輝美

本校のみならず土浦市のランドマークにもなっている旧本館、その前庭の銀杏が秋の深まりと共に黄金色の輝きを増しています。進修同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。また、日頃から本校の教育活動に深いご理解と温かいご支援をいただいておりますことに、心から御礼を申し上げます。

創立百十周年を迎えた今年、特別な式典は実施しませんでしたが、同窓会で記念のクリアホルダーを作って頂き、全生徒と全職員に配布させて頂きました。教室などへの置き忘れがないことから判断するに、大変好評だったのではないかと思います。旧職員の飯村先生が写した旧本館の写真と、同じく旧職員の長谷川先生が旧本館を図案化したものを刷り込んだものです。なお東進会、水戸支部、常陽亀城会などの支部会の折には原価で買って頂きました。このあと来年、再来年の入学生には合格祝いとして配布するつもりです。入学前から本校の求心力の一助になってくれればと願っています。

生徒のクラブ活動についてですが、相変わらず自主的活動が活発に行われており、特に本校の三大行事である六月の「一高祭」、九月の「一高オリンピック」、十月の「歩く会」などでは、生徒が自主的に実行委員会を組織し、企画・立案の段階から運営・実施、反省・評価に至るまでを取り組んでおります。今年で「一高祭」が第六〇回、「一高オリンピック」が第三九回、「歩く会」が第三〇回を数えました。このように着実に回数を重ねられるというのは、本校に学ぶ生徒達の能力の高さを示すものだと思います。今年度の「一高祭」は、『Puzzle～無限につながる僕らのピース』というテーマで行われ、生徒それぞれが個性を発揮して盛大に開催されました。天候にも恵まれて二日間の入場者は三千名を超えたのではないかと思います。現在の一高生を見るにはこれが一番かと思います。毎年夏に先駆けて催される一高祭を是非一度ご覧ください。また部活動についてですが約八割の生徒が加入しています。吹奏楽・合唱・弦楽の音楽三部や、硬式野球・サッカー・バスケット・バドミントンなどは、それぞれ多数の部員を抱えて活動しており、ある時代の同窓生の方には信じられない放課後の風景ではないかと思います。この背景には保護者の方のいわゆる「勉強だけでは」という意識があって、小さい頃からの習い事や、スポーツ少年団活動の延長線に部活動があるのではないかと思います。

入試状況でございますが、東大合格者数が県立浦和に次いで全国公立二位になるなど、今年度もしっかりした実績を上げてくれました。しかし現在の生徒達は、東大・京大・東工大・一橋大・国公立医学部のいわゆる超難関国立大を第一志望とし、後は早慶を初めとした東京の私立大へという構図があり、筑波大などの難関校へいかに志願させるかなどが課題となっています。ご承知のように超難関国立大は全国区の戦いであり合格は大変困難であります。そのためには「やればできる」という断固たる決意を胸に生徒諸君には頑張ってもらうしかないのですが、叱咤激励の意味を込め、「鬼のようにできる土一の英語」というキャッチコピーを知ってる?などと声をかけ、生徒の意識改革に努めています。

最後に、これからの本校の課題等についてですが、知徳体のバランスのとれた人間として生徒たちを育てながら、どのように現在の進学実績を維持、発展させていくかということにつきるかと思います。幸いにして本校の生徒は、主体的で、自らの判断で行動できる素質を有しています。要は、その素質をいかに磨くかであり、妥協を許さずにより高い知性と徳性を身に付けるための切磋琢磨の機会を造り出していけるかというところにあります。その点をノブレス・オブリージュという言葉に要約して今年の中学生向け学校案内パンフレットに掲載させて頂きました。その意は「わが校は、新しい社会をデザインする先導者として未来を切り拓きたいと願う若者たちが集う学舎です。そのために勉学に勤しみ、心身を鍛え、友との交流を糧とする―諸君には、その責務があるのです。」というものです。これを受けて本校の目指す教育を【BE A CREATOR

3面へ続く

平成十九年度 進修同窓会総会開かれる

去る四月八日(日)、平成十九年度定期総会が、母校土浦一高体育館において会員多数出席のもと盛大に開催されました。午前中早くから母校を訪れた会員も少なくなく、旧友との再会を喜び合ったり、旧本館周辺で記念写真を撮ったりして、開会前から盛り上がりを見せていました。

総会は、恒例となった応援指導部のリードと吹奏楽部の演奏による、校歌、応援歌、一高讃歌の斉唱で開会し、物故会員への黙祷の後、幡谷祐一会長、村松輝美校長の挨拶があり、青山和義副会長を議長に以下の議案が審議され、可決承認されました。

一　第一号議案　平成十八年度事業報告及び決算報告について

二　第二号議案　同窓会役員の改選について

三　第三号議案　平成十九年度事業計画(案)及び予算(案)について

なお、第一号議案では、今年が本校創立一一〇周年であることから、記念事業として、旧本館前ロータリー改修工事、応接室・会議室空調機設置、記念品（クリアホルダー）の作成など、別途積立金の決算が承認されました。

また、第二号議案に関しては、長年会長として本会の運営と発展に尽くされた幡谷祐一氏と本校校長を経て副会長を続けてこられた横田尚義氏から一身上の都合による辞任願が出されていたもので、これを承認し、新会長に平田公敏氏（併二）と新副会長に長瀬宗男氏（高十一）を選出しました。

総会後、卒業周年祝賀式に移り、本年は六十周年はなく(本年該当の中四十七回生は昨年、中四十六回生と一緒に実施したので)、高九・定七回(五十周年)、高十九・定十七回(四十周年)、高三十四・高理十一・定三十二回(二十五周年)の方々をお招きいたしました。祝賀式では、来年五十周年を迎える高十回の平堅次氏より祝辞が述べられ、招待者への記念品贈呈の後、高九回の古森貞弘氏より、本年卒業五十周年を迎えられた皆様を代表して謝辞が述べられました。

また、会場を移動しての祝賀会にも数多くの方々の参加があり、一転して賑やかで和やかな祝宴がもたれました。

応援指導部指揮による校歌斉唱

総会の会場風景

幡谷祐一・前会長に感謝状の贈呈

2面からの続き

OF THE FUTURE】（未来への創造者たれ）とメッセージ化し、本校のブランドスローガンを【FLAGSHIP HIGHSCHOOL】として意識の高揚を図っています。

以上が主な学校の様子でありますが、最後に一つ施設面での夢を書かせて頂きます。現在、県南地区にはたくさんの私立高校があり、それぞれが講堂を有しています。できましたら本校にも講堂を、というものであります。具体的には進修記念館のアリーナ部分に自動迫り出し式のスタンドを設置し、必要に応じて講堂としてはどうでしょうか。学校としては学年ごとの集会やＰＴＡ研修会など多目的に使用できるのではないかと考えております。また、進修記念館がより一層同窓会館としての役割を果たせるのではないかと思います。同窓会の皆様方にお考えをいただけたらと思います。

本校の発展は、時代を超えて同窓会の皆様方が築きあげられたものであり、心から敬意を表すると共に、厚く御礼を申し上げる次第でございます。今後ともご指導とご支援をお願い申し上げましてご挨拶、ご報告と致します。

卒業五十周年記念同窓会

高校九回生にとって、平成十九年四月八日は、長くて、短い一日でした。

昭和三十二年三月に卒業して、その後の五十年間は、私たち一人一人が、日本の歴史を変えた主人公として自負できる五十年でもありました。

そんな思いもあって、五十周年記念同窓会は、旧来の知己を確かめ合いながら、五十年の自分史を語りあう機会にしたいと、六回の幹事会、三回の『九回生だより』の発行を通して、出席を呼びかけてきました。その甲斐あって、今回百三十二名の仲間が参加しました。感無量であります。

出席者の中には、卒業以来五十年ぶりの方々、そして病気を押して出席した方がおりました。一方この日を心待ちにしながら、病気で出席できない方、この日の直前に亡くなられた方等々、残念至極な方もおりました。

さて私たちが入学した年は、戦後十年目にあたる時期一九五五年でありました。そしてこの時期こそ近代日本の歴史上、最大の転換点でありました。政治的には「五五年体制」が始まった時期であり、高度経済成長の代名詞でもあります「神武景気」もその時代に始まっています。ようやく日本という国の新しい生き方の方向づけが出来始めた年でした。

しかし、私たちはそれぞれに、貧しい生活実感を思い出します。小学校、中学校、高校と、遊びと学資稼ぎを両立させていた仲間が大勢います。また大学へ進学したいけれど、あきらめた

4面へ続く

3面からの続き

仲間も数多くおります。

その後、一人一人が経済成長と生産性向上を追求する先頭に立ちバブル期には職場のリーダーとして、奮闘してまいりました。その結果、それぞれの職場で相当の地位を築いてきた五十年でもありました。

高校時代の思い出はつきませんが、一高野球の黄金時代、九回生は十回生の甲子園出場への花道を作りました。また進学指導もかなり熱心でしたが、先生方の意気込みの方が先行していたようです。

これから十年後に六十周年がありますが、それまで毎年「学年同窓会」が予定されますので、体調を整え、一人でも多くの方が参加されるよう健康な生活に心がけたいと思います。

最後になりましたが、今回の記念式典の開催につきまして本部の関係者のお心遣いに深く感謝申し上げます。

(古森貞弘　記)

十九回卒記念同窓会

私共、十九回生は、今年卒業四十周年を迎えました。四十周年では進修同窓会から総会および祝賀式へとお招きいただくということで、それに合わせて自分達の同窓会を開催することを計画しておりました。

そんな折、同級生の小張隆男君のお宅に立ち寄ったところ、息子さんが同窓会の幹事業務の全てを代行してくれるサービス『みんなのえがお』(http://www.minnanoegao.com/)を立ち上げたと言う話を聞きつけました。そこで、代表幹事の宇田川仁一郎君をはじめとしてクラス幹事が集まり、サービスの内容を伺い、同窓会の運営を依頼することになったのです。

開催日は、総会前日の四月七日。会場は「ホテルマロウド筑波」。あとは随時相談のみでお任せです。『みんなのえがお』の小張正暁君も土浦一高卒業の後輩ということで、準備は至ってスムーズでした。細々とした同窓会業務の手間を考えると、まだまだ仕事も現役の十九回生にとっては、こんなに有り難いことはありません。

同窓会では八名の恩師の先生方と百二十名を超える同窓生が集まり、盛大な同窓会となりました。各クラスごとの近況報告では、演台でマイクを握る先生方の昔と変わらぬ溌剌としたお姿に感動し、余興のコーナーでは卒業アルバムの写真が大スクリーンに映し出され、それに合わせてプロミュージシャンの小松崎純君がピアノで胸に迫る音楽を披露してくれました。三時間もの長い宴会時間を取っていただいたにもかかわらず、最後まで大変盛り上がり、非常に思い出深い同窓会となりました。

特に今回は土浦一高卒業生の深い繋がりというものを感じた同窓会であったと言えるでしょう。『みんなのえがお』の小張君は同窓生の息子さんであり、後輩。そして幹事の須賀田喜孝君にとっては教え子です。そして、クラス幹事の村松輝美君は今や母校の現校長。同窓会総会で挨拶する村松君の姿を見つめながら、懐かしいような不思議な感覚に陥ったことを覚えております。と同時に、非常に残念であったことは、同窓会の直前にF組の担任でいらっしゃった久保隆司先生がお亡くなりになられたこと、そして、前回二十五周年の同窓会を先頭に立って執り仕切ってくれた山田昇君がお亡くなりになったことです。お亡くなりになった方や、今回惜しみつつも同窓会に出席出来なかった方のことを想いつつ、よりいっそうこの絆を大切にしていかねばならないと胸に刻みました。

最後に、ご出席頂いた同窓生の皆さん、恩師の先生方、そして準備に携わっていただいた幹事の皆さん、ありがとうございました。また、このような機会を設けていただいた進修同窓会本部の皆様に深く感謝いたします。次回、卒業五十周年でも変わらぬ笑顔にお会いできることを楽しみにしております。それまで皆様お元気で!!

(中村志郎　記)

卒業二十五周年を迎えて

去る四月七日、同窓会総会に先立ち卒業二十五周年を記念し、我々昔三十四回・理十一回生としては卒業以来初めてとなる学年全体での同窓会を開きました。母校に勤務している酒井君と私が事務局になり、各クラスからの幹事約三十名と、数回にわたる幹事会を重ね企画を練りました。全員の住所調査は困難もありましたが、加治幹事長をはじめとした、幹事の協力により、百二十六名の同級生と九名の恩師の先生方においで頂き、盛大な同窓会にすることができました。

当日は、受付時から、いきなり懐かしい顔に出会い思い出話に花が咲くという光景があちこちでみられました。中には一目見ただけでは誰だかわからないという人もいて、改めて二十五年という年月を感じたりもしました。

宴会前に記念撮影を行いましたが、校歌・応援歌が流れる中、全員の前に恩師の先生方が姿を見せると大きな歓声が上がり、最初から大いに盛り上がりました。

宴会は、まず幹事長である加治行雄君の挨拶から始まり、恩師を代表して学年主任の原先生の御挨拶、亡くなられた恩師及び同級生への黙祷、元生徒会長五来君の乾杯の音頭と続きました。その後歓談を挟み、全員での校歌斉唱、恩師への花束贈呈の後、御出席いただいた原先生、株木先生、下代先生、戸部先生、黒田先生、井川先生、横倉先生、市川先生、武井先生に当時の思い出やら近況をお話いただきました。

恩師の先生方や仲間たちとの歓談の中で、二十五年前の青春の日々が鮮やかに甦ってきました。試験が多く大変だったこと、一高祭で盛り上がったこと、部活動で毎日必死に練習したこと、友人といろいろなことを語り合ったことなど、様々なことが思いだされました。

予定していた時間はあっという間に過ぎ、名残惜しい気持ちのまま、会は終了となりました。高校時代の多感な時期を過ごした仲間たちと掛け替えのない時間を共有できたことは、何にもまして大きな喜びでした。また同窓会を開きたい、今度はクラスでやろう、というような声があちこちで聞かれました。

翌八日の同窓会総会、祝賀式、祝賀会には周年学年の一つとして招待を受け、記念品をいただきました。このような機会を設けていただきました同窓会本部の方々には深く感謝いたします。今後も、普三十四回・理十一回生全体として、母校土浦一高及び進修同窓会の発展に寄与していければと思っております。

(諏訪原　哲　記)

定時制部会と総会

今年も定時制の総会は、進修同窓会と同日、4月8日午前11時より定時制給食室に於いて、25・40・50周年該当者、役員、学校関係者30名弱の参加で挙行され、定時制関係者及びOBの協力によって飾られた校歌の額を見上げ胸をはって校歌斉唱を行った。総会終了後調理師・栄養士御両名による温かい味噌汁で、弁当を食べ、歓談・旧交をあたためる。

定時制は、土浦一高創立百周年記念に建てられた、進修記念館で、入学式・卒業式を挙行しております。OBも参加し、祝辞、国歌、式歌、校歌斉唱を行います。定時制の式典には丁度良い会場です。感謝いたしております。

振り返れば平成10年4月第二日曜日の総会で、定時制創立50周年記念式典を、11月8日に挙行する事が決議される。半年で何が出来るのか、式典の成り合いが不可解の為、学校側との打合せを重ねる。資金は進修同窓会長はじめ関係者各位、OBより頂戴いたしました。定時制部会の存在が確認出来た。定時制を卒業して良かった。言葉にならなかった。来賓の芳名簿は学校側にお願いし、招待状、功労者表彰、記念誌、記念品、プログラム、予算、会場設営と一緒に動き出す。

おかげをもちまして、定時制創立以来初めての大事業も、内外のご協力で成功裡に終ることができました。遅れましたがご報告いたします。

土浦一高定時制部会
会長　柳沢　正男

恩師を訪ねて ⑪

体育　矢口四郎先生

在職　昭和二十四年三月～四十九年三月(教諭)

秋日の午後、閑静なご自宅の一室で先生のお話をうかがった。

戦時下、一人の中学生が必然のように踏み出した歩み。戦後の再出発と母校教員時代。その後の管理職としてのご活躍。そして土浦三高校長で教員生活を締めくくるまで話題は尽きなかったが、紙面の制約から本紙には、体験者だけが語ることができる戦中・戦後の状況と、先生の教員生活の大半を占める一高での日々、その二つを柱に掲載させていただいた。（編集委員会）

土浦中から海兵へ

太平洋戦争たけなわの時代だったから、一人前の男は兵隊に行って国のために奮闘するもの、という教育を受けた。当時中学に正課として「軍事教練」があって、週に三ないし四時間、鉄砲を担いでの行進や射撃訓練が行われた。現役の将校が各学校に配属されていて、軍事教練を指導した。まさに戦争に直結した教育だった。水戸の第十四師団の上級将校が来校して、査閲とよばれる教練の評価が行われた。その結果がかんばしくない学校は、将来兵隊に行った際に幹部候補生への志願などが難しくなるともいわれた。

わが家は海軍軍人一家というおもむきがあり、わたしの進むべき道も当然のようにその方向を指していた。長兄（土中25回卒）も海軍機関学校へ進んでいて、わたしは海軍兵学校を志願した。学科試験ばかりか身元調査も厳しかった。水戸の試験場には五百人くらいの志願者があったように記憶する。夏休み中五日間にも及ぶ学力試験や口頭試問の結果、最終的に合格したのは二十人くらいだった。

白い制服に短剣を吊るした海兵は当時若者のあこがれの存在だったが、入ってみると、甘い憧憬からはかけ離れた世界だった。生活はすべて分隊（一～三年五十名ほどで編成）単位で、上級生の鉄拳制裁まで交えた厳しい指導が待ち構えていた。日課も午前中は数学や英語や軍事学などの講義、午後は手旗や通信などの実技、端艇の訓練と息つく暇も無い有り様で、外出時だけがわずかにくつろげる一時だった。やがて上級生になると生活にも慣れ、何とか学校生活を楽しむ余裕ができた。後年一高で同僚となる横田尚義先生（土中44回卒）が当時下級生に在学していた。

広島原爆・終戦

わたしは広島に原爆が投下されるのを偶然目にしている。その時は岩国の先の大島にいて、航空班のわたしは広島の方を向いて天測実習の最中だったが、突然すごい閃光が走った。どす黒くて赤みを帯びた光だった。少し間を置いて（広島とは数十キロの距離があった）雷が百個も落ちたかと思われるような轟音が響き、きのこ雲が立ち上った。当座は何が何だかわからないような状況だった。

終戦の玉音放送はやはり大きなショックだった。せっかく海兵にまで進んだのに、という悔しさもあった。一方海軍は戦況の不利な情報も早くから得ていて、敗戦間近の情勢を教官たちは察知していたらしく、敗戦に直面してもさほどの混乱は見られなかった。一週間ほど今後の対応や生き方についてなどの指導があり、終戦の日から十日後には一斉帰省となった。

岩国から臨時列車で帰郷することになり、途中広島に停車したが、駅とはいえ駅舎も何もない、一面焼け野原と瓦礫の山、そのうえ悪臭が耐え難かったのを思い出す。

夜に入ると、沿線はどこにも灯りが見えず、真っ暗闇が続いた。

敗戦直後の混乱の中連絡もとれず、土浦はどうなっているのか、家族は無事か、一切わからないまま、不定期に停車を繰り返す列車に揺られ、幸い戦災を免れた土浦に無事帰ることができた。

高師に出直し入学

今後どうしてよいかわからないままあれこれ考えぬいた結果教職を目指す決心をした。子弟の教育に携わることで日本の再建に尽くそうという思いだった。贖罪意識も働いたかもしれない。東京高等師範学校（現在の筑波大の前身）の編入試験を受けることにし、志願票の第一志望欄には得意だった物理を、第二志望は剣道が好きだったので体育と記した。第一志望の学科試験も通り口頭試問も終えほぼ合格という段階まで進み、気持ちはすっかり物理教師になりかかっていた時、体育科からの呼び出しがあり、入室すると主任教授の面接が待っていた。その結果「君のような体力気力にまさる溌剌とした人材がこれからの体育指導者にはぜひ必要だ」と熱心に勧められ、わたしもその熱意に感じて応諾したため、口頭試問のみで体育科合格がその場で決定となった。

卒業後最初に勤めた県外の高校から、機会があって母校に転じたのが昭和二十四年のことである。

当時は疎開や満州からの引き揚げ者などで、一学級が五十人以上のすし詰め状態で、体育の授業などはまともにできなかった。戦後のすさんだ空気のせいか、生徒同士の喧嘩騒ぎなども毎日のようにあったが、そこは海兵で鍛えた気合で、そうした生徒の指導は進んで引き受けた。

担任、学年主任のころ

わたしが一高に勤めた当時、優秀な生徒は水戸一高や東京の私学に行ってしまうという状態で、何とか土浦一高へ優秀な生徒を集めなければということで、菅沢先生はじめ羽方先生や古橋先生などが中心になって、生徒学力のレベルアップを図るさまざまな努力がなされた。水戸一高に並ぶ進学校にしたいというのが教員共通の思いだった。

高12回の最優秀クラス（当時は学力別編成を行っていた）の担任の都合で中途学年からわたしがその後を引き継ぐことになった。父母からは「体育の先生が担任では」という不安の空気も感じられたので、これは何としても成績を上げなければと頑張った。頻繁に生徒と個別の面接指導をしたことがよかったのか、進学面で結構いい成果をあげることができた。その後多くの先生方が面接指導を取り入れるようになった。

学年主任は高19回と高22回で務めたが、両学年とも苦労は少なくなかった。高19回は元気者が多く生徒指導面で骨が折れた。高22回のときは、いわゆる学園紛争の影響が本校にも及んできた時期で、そうした生徒の動きなどに神経をすり減らした。また、生徒会が卒業式改革を取り上げ、様々な要求もしてきた。答辞原案が学校批判に終始していたので、何回も書き直しさせたりなど、根気強い指導を続けたものだ。卒業式における来賓のあいさつが行われなくなり、代わりに学年主任訓話が持たれるようになったのもそうした過程を経てのことだ。

いまの楽しみ

かつての左党もいまは健康上もっぱらポイントワンを愛飲している。TVは藤沢周平ものの時代劇をよく見る。しかしそれより何より教え子の皆さんがそれぞれの分野で活躍するのを見聞きすること、これが一番の楽しみだ。

【略　歴】

一九二五年　土浦市生まれ
一九四三年　旧土浦中学校卒（中42回）
一九四三年　海軍兵学校入学
一九四五年　終戦、帰省
一九四六年　東京高等師範学校編入学
一九四八年　同校卒、石巻高体育科教諭
一九四九年　土浦一高体育科教諭
一九七四年　筑波高教頭
一九七九年　江戸崎西高校長
一九八三年　土浦三高校長
一九八六年　同校校長退職

卒業生レポート ⑫

「進路に悩む諸君へ」

大阪赤十字病院皮膚科部長
堀口裕治
高十九回（昭和四十二年卒）

在校生の皆さんこんにちは

私は病床数八〇〇を超える基幹病院の皮膚科の部長をしていますが、皆さんの年のころにはこんな職業に就くとは考えてもみませんでした。あのころの夢は物理学者になることでした。どこでどう転んだのかのお話をして、あなたがたのお役にたてればと思います。

あなたがたの頃は物理学者に

自分で言うのもおかしなことですけれど、私はあなたがたのころ物理や化学が大好きな純朴な少年でした。村松校長先生と同級ですから、聞けばそうだったと言ってくれますよ。湯川秀樹がノーベル賞を取ったのはずいぶん以前でしたが、朝永振一郎がもらったときのことはよく覚えています。高校一年の時でした。「鏡の中の世界」や「光子の裁判」をワクワクしながら読んだことを思い出します。私も京都大学の理学部を目指し、一年浪人したあと首尾よく入学することができました。

物理学の難しさ

ところが、あこがれの理学部に入学してから受けた大学の授業は私の想像をはるかに超えて難しいものでした。解析幾何学にはなんとかついて行けましたが、解析力学はどうにもイメージと数式が一体化してくれなくて困ったのを覚えています。ダイバージェンスとかローテーションとか、まあチンプンカンプンに近かったものです。流体力学はいうにおよばず、三回生の時に習った量子力学もお手上げでしたね。量子力学はQuantum Mechanicsと言いますが、「なにがカンタン・メカニクスや。むっちゃ難しいやないけ」と冗談を言ったものです。

理系文系はわからない

ところが、そのころから文学や哲学に親しむようになりました。私は一高時代に、現在北海道大学法学部教授をしている吉田克己君とずっと親しくしていましたから、その影響を受けて文学に近づいていました。大学に入ってからも文芸的な世界にますます入り込み、石川淳や安部公房、評論では花田清輝などを手当たり次第に読みました。実存哲学にもかぶれました。言うまでもなく理解しがたい世界ではありますが、同じ理解を超えた世界なら物理学より実存哲学の方に強く引かれていました。

そうして人並みに学生運動に首を突っ込んで四年を過ごし、卒業間際になってふと気がついたのは、自分は実は文系の人間だった、という恐ろしい事実だったのです。

一念発起

このまま大学院に進んで物理学に本格的に取り組んだとしても、自分の能力では先人の業績を理解するのがようやくであり、その肩に乗って、そこから先に一石を投じる力は自分にはないのではないか、と思い至ったときには、文学部に行き直そうかと考えたものです。でも、文学部に行って、それでメシが食えるかどうかは分からない、と言う素直な不安もありました。自分の能力ばかりでなく、世間が分かってきたのです。そして一瞬考えて得た結論はこうでした。「手に職をつけよう。医者になろう。文学部はそのあと考えよう」と言うものです。

お医者なら

四年のあいだ理学部で学んだ私の頭は、純粋な文系の頭にはなりえるはずもなく、理系文系を行ったり来たりする、実に中途半端な二十三才の春でした。お医者なら、そう言う中途半端な精神構造の持ち主でもやって行けるんじゃないかと、ひそかに期待するところもありました。

塾の講師をしながらおのれの受験勉強をし直し、私は京都大学の医学部に入り直しました。一年かけて受験勉強をし直したのは、本であふれかえった下宿を替える気がまったくしなかったからであります。

理詰めで覚える

医学部の授業は、骨の名前は言うにおよばず、骨のひとつひとつの穴の名前や突起の名前、そこを通る神経やそこにつく筋肉の名前を覚えることから始まり、症状も病名も処方も、覚えることが第一でしたが、それでも理学部卒の頭には常に「何でや?」という疑問がわき、理屈をつけてから覚える方が覚えやすいことは言うまでもないことでした。

例えば、医学用語にはコラーゲンとかアンドロゲンとか、「なになにゲン」と言う言葉がたくさんあります。ある時「これはなんや?」とふと思って調べたことがあります。-genと言うのはラテン語で「生み出すもの」という意味の語根だというのですね。コラーゲンはgoll（すなわちニカワ）を生み出すものと言う意味であり、アンドロゲンはandro（すなわちオトコ）を生み出すもの、と言う意味になるわけです。遺伝子と訳されるgeneはまさに「生み出すもの」なのです。

電子顕微鏡との出会い

組織学や病理組織学の好きだった私は専門分野として皮膚科を選びました。皮膚科には多様な病変があり、皮膚の組織検査は安全で簡単ですから、皮膚科医は誰でも自分で検査を行い、自分で診断するものだと言うことを知ったからです。皮膚科に入局してから私は研究テーマとして、皮膚の電子顕微鏡的病理を選びました。学生時分に遊びに通った解剖学教室の暗がりで電子顕微鏡を見、これは面白いものだとひらめいたのです。

電子顕微鏡は私にとって魔法の道具になりました。真空装置のうなりをバックグラウンドに、器械と一体になり、一ミリ四方の四分の一よりもずっと小さい試料に世界を見、ダイアルのひとまわしで電子の収束発散を調節しながら、表皮の細胞間の接合に迫ることができました。暗がりでのただひとりの作業です。夢中になりました。あれほどイヤだったローレンツ力（磁界のなかで運動する電子の受ける力）を手玉に取っている自分におかしくなりました。

そう言うわけで

私は京大病院の皮膚科に十七年在籍し、電子顕微鏡を使った研究を続け、十一年前にいまの病院に部長として赴任しました。患者さんたちに理詰めで説明しようとするのはいまも変わりませんし、若い医局員を指導するにも「何でや?」と尋ねては困らせています。スジは変わらないものです。

あなたがたも自分の進路に悩むことはあるとおもいます。進路を変えることも出てくるかも知れない。でも、どの分野に進んでも、そこで得た経験は次の世界での糧になります。道に迷ったら、思い悩まず迷った道を行ってみたらいい。ダメなら別な道を歩むだけです。頭で考えた自分のイメージにとらわれず、試してみることが大事です。

私の文学部ですか?定年になったら考えます。ではまた。

【略歴】
1948年　土浦市に生まれる（誕生日は11月12日「皮膚の日」）
1973年　京都大学理学部卒業
1979年　京都大学医学部卒業
　　同大学皮膚科入局
1981年　京都大学皮膚科、助手
1987年　米国アラバマ大学皮膚科留学
1993年　京都大学皮膚科、講師
1995年　京都大学附属病院皮膚科、病棟医長
1996年　大阪赤十字病院皮膚科、部長（現職）
所属学会　日本皮膚科学会（中部支部代議員）、日本東洋医学会、日本電顕皮膚生物学会（運営委員）

支部だより

日立支部

進修同窓会日立支部は、昭和六三年三月水戸支部（当時、幡谷祐一水戸支部長）の応援を受けて、茨城県北地区在住・在勤の同窓生に声をかけることで発足（設立総会開催）しました。

その後、寺田光一（中四〇回）支部長のもと、不定期（平成一、六年）に支部総会懇親会を開催してきましたが、しばらく開催が途切れておりました。

平成一五年に寺田支部長、蔦田条一（高六回）幹事長を中心に役員見直しを行い、長南達也（高二三回）新支部長のもと支部総会懇親会を開催しております。

日立支部総会には、進修同窓会名簿や聞き伝えにより、県北地区（東海村、常陸太田市、日立市、高萩市、北茨城市）在住・在勤の同窓生を調べて約百名の方に案内を出しております。しかし、県北在住者が少ないことや、勤務先異動などがあり、支部会員数の全貌把握が困難な状況にあります。

最近では、平成一八年一二月に、支部会員一三名出席のもと、本部から大曽根宏亮副会長、岡崎尚俊教頭先生を来賓としてお迎えし、支部総会懇親会を開催しました。総会では、蔦田幹事長の経過報告、長南支部長の挨拶、寺田顧問の音頭による乾杯に続いて、校歌斉唱、大曽根副会長・岡崎教頭先生からの母校や同窓会の近況報告を伺い、学生時代の思い出を遡るとともに、現在の学校の変化に時の流れを大いに実感しました。

その後、参加者全員の近況報告などにより、少人数ではありましたが大いに懇親を図ることができました。これからも会員交流のため、不定期ながらも総会懇親会を開催してゆく予定です。

（日立支部長　長南達也）
（支部幹事　小山行雄　記）

東葛支部

東葛支部同窓会は、平成五年に柏市在住の土浦一高ＯＢ会として発足しました。

柏地域は、土浦と東京を結ぶ常磐線上の中間に位置し、一高ＯＢが自立し、結婚し、職場へも帰省にも格好の場所として居を構える人が増えたものと思われます。

当初は、柏市内で古くから開業していた山口和夫氏（Ｓ18卒）（本年８月死去）を会長に擁し、押手克夫（Ｓ38卒）が幹事となり、スタートしましたが、その後、回を重ねるに従って、柏周辺の松戸・我孫子・野田・流山在住の同期の仲間も誘い合うようになり参加者も増えたので、これらの地域の旧地名である「東葛飾郡」（東葛地区）一帯のＯＢ会として平成十六年より「土浦一高進修同窓会東葛支部」と名称変更しました。

この際、東葛地区在住のＯＢ名簿を購入し、全ＯＢに同窓会への参加を呼掛けました。実に、７００名の方々に及びました！

その結果、現在では、毎年１５０名余に総会案内を発送し、出席者40名、会費納入者80名に至っています。東葛支部改称の総会後には、記念に支部会報（写真）を発行し、１５０名余の会員に送付しました。

当支部総会は、毎年11月第２土曜日に開催し、本部役員・校長先生に参加いただき学校の近況をお話いただいております。

支部総会の特徴としては、毎回、一高ＯＢによる講演会を実施しております。

ここ数年を列挙しますと、

Ｈ15年（10回）林（広沢）幸子氏（Ｓ37卒）「甦るテレジンの子供たち」

Ｈ16年（11回）小幡政人氏（Ｓ38卒）「待望の常磐新線」

Ｈ17年（12回）秋山尚夫氏（Ｓ36卒）「道路の交通運用体験雑言」

Ｈ18年（13回）雨貝二郎氏（Ｓ39卒）「未来のエネルギー：バイオエタノール」

今年（14回）は、大野金一氏（Ｓ31卒）「三位一体、地域格差、司法改革」と、〝その道の第一人者〟からタイムリーで興味深いお話が伺えるのを、出席者一同贅沢な楽しみにしています。

総会会場は柏駅前の中華料理店で、二次会は近くのカラオケバーを借り切り夕方に解散します。

最近は、小池忠男元会長（Ｓ28卒）の同期組が多数参加いただいていますが、今後は、Ｓ30・40年代卒業生へと中心がシフトしながら、東葛支部の益々の発展に向けて努力してまいりたいと存じます。

（東葛支部　支部長　田村　武夫）

鶴岡義雄さん90歳　中36回卒。洋画家、芸術院会員、二科会前理事長、10月27日死去。林武に師事。豊かな色彩と近代感覚あふれる作品で知られ、「舞妓」を題材にした作品で独自の作風を確立。90年に日本芸術院賞を受賞。02年～06年に二科会理事長を務めた。

平成二十年度　進修同窓会総会の御案内

次年度進修同窓会総会・卒業周年記念祝賀式は次の通り開催します。

一、期日　平成二十年四月十三日（日）　午後一時
二、会場　土浦一高体育館

卒業周年記念祝賀式

卒業五十周年　高十回　　定八回
卒業四十周年　高二十回　定十八回
卒業二十五周年　高三十五回　定三十三回

一般会員・周年記念会員の数多くの方が母校の門をくぐられることを期待しております。
尚、総会、祝賀式終了後、市内にて祝賀会（懇親会）を開催いたします。

お知らせ・紀行文

鈴村博一氏(高10回)「日本対がん協会賞」受賞

今年度の日本対がん協会賞がこのほど発表され、子宮がんの細胞診の技術普及などに功績があったとして鈴村医院の鈴村博一院長が選ばれました。千葉大で病理学を専攻し、癌研究会附属病院（東京）勤務時より、子宮がん細胞診の専門医として研究を進めてきました。土浦で開業してからは、県などと協力して、産婦人科医や検査士らの研修を行って細胞診の技術向上を図り、県産婦人科医師会の副会長として、市町村などと検診の受診奨励活動に取り組んできました。こうした長年に渡る高度な医療技術向上の実践的活動が高く評価され、今回の受賞となりました。

櫻井光孝副会長「文部科学大臣賞」受賞

昭和二十三年に全国高等学校定時制通信制教育制度発足以来、本年で六十周年を迎えました。文部科学省では、この機会に定通教育に功労のあった者に表彰を行ないました。

本県からは、進修同窓会副会長の櫻井光孝さん他五名が候補者として推薦され、去る七月二十七日に東京において受賞されました。

櫻井さんは、本校定時制第四回の卒業生として、母校の発展のために長期にわたり献身的に貢献されてきました。昭和五十年から平成元年まで進修同窓会定時制部会長を、昭和六十二年から現在までは、進修同窓会副会長として活躍されると共に、平成十三年からは県高校定通教育振興会の理事としてもご活躍され、これまでにも全国高校定通教育振興会功労者表彰も受賞されております。このような役職、表彰とは別に、櫻井さんは、本当に親身になって定時制の後輩を応援してくださる方であり心から感謝しております。

九月二十九日には、関係者五十名の出席の下、受賞記念の祝賀会を開催いたしました。櫻井さんのますますのご健勝、ご活躍をご祈念申し上げます。

ソウル記　理科　臼井　健司

化学科H先生のリーダーシップにより、理科のスタッフほぼ全員にO先生のお嬢さんが加わり、2泊3日のソウル訪問が実現した。ソウル付近から延びる前線が関東地方にかかり、それまでの猛暑が一息ついた8月末の旅行となった。

韓国といえば、朝鮮戦争、朴正熙大統領時代の「政治弾圧」、そして文学界でも「抵抗詩人」金芝河、催仁勲の小説など当時の苛烈な政治状況がからむものが印象に残っている。催氏の小説「広場」は、「北」と「南」両国家の狭間で漂流する青年の魂を描いた、幾分哲学的な作品である。

訪問二日目の早朝O先生とホテルの前にある南山に40分ほどかけて徒歩で登った。後でガイドの金さんには「観光客なのに歩いて登るなんて」とあきれられた。南山は「広場」の主人公の青年が恋人や友人と語りあった公園だ。哲学の学徒であるこの青年は、父親が「北」に渡ったため刑事から虐待を受け、「南」に居場所を失くし「北」に密航、やがて「北」の一員として「南進」でソウルへ攻め込む。そこで元恋人の夫を拘束し虐待する。しかし、「北」でできた自分の恋人が「南進」で戦死。その後多国籍軍の捕虜となり輸送船に乗せられる。

南山を登り切ると、周囲の低山を背景にしたソウルの町がよく見えた。山頂では、旅行中の大学生から老人まで、思い思いに過ごしている。東屋のベンチには、ストレッチや腕立てをしたり雑談をしたりする人がいた。片や広場の片隅では、やや恰幅の良い女性の集団が、ヤッヤッとかけ声をかけながら独特の体操をしている。側にある駐留米軍基地から、若い兵士が訓練のために登ってきたが、少し休んだだけで後からやってきた教官に促され降りていった。「広場」の中でも訓練のために登ってくる若者達が描かれている。催氏も、私たちの立っている辺りで登ってくる人々を眺めたのだろう。

一人の老人が片言の日本語で一生懸命話しかけて来た。彼の話から「東京オリンピックのころ日本に滞在していたことになる」とO先生は推測した。記者か、選手か、労働者かどんなことで日本に来たかはとうとうわからなかったが、戦後の日韓のつながりが生身の人を介して伝わってきた。

南山に登った日の前夜、ソウル旅行定番の南大門市場を訪れた。中国などと違って雑踏の空気が柔らかい。売り子の青年達が、建ち並ぶ眼鏡屋や食料品店、鞄店などの店先からしきりに日本語で声をかけてくるがどこか控えめだ。日本語学習者数世界一の国とはいえ、「完璧なウソモノ」、「完璧なマネモノ」といった、冗談なのか本気なのか判然としない、模造品売りの売り声が楽しい。

街の散策後、特上カルビの夕食のその後に、夜中過ぎまで屋台で飲み食いをしていた二人の強者によれば、人通りがようやく少なくなった真夜中2時過ぎ、路地に出店していた店主達が、地方から買い付けにきていた商人に商品のまとめ売りをしていたという。国道を「現代社」製高級車が走り回り、マンションは建築ラッシュである。こうしたエネルギッシュな様子からは、大リストラ以降貧富の差が広がり、少子化と不況に悩む国というのが信じ難い。

「南進」当時の経済は、「北」の方が大分良く、現在のソウルとは比ぶるべくもないだろうが、当時も人々はエネルギッシュであり、政治運動が渦巻いていた。しかし「広場」の青年はあくまで非政治的で、居場所を求めるためにのみ「北」に密航し、「南進」に参加する。多国籍軍の護送船に乗せられた彼は、「北」にも「南」にも自分の居場所がないと感じ、戻らぬことを申告、米国に渡り気ままに生活する自分を夢想するが、そこにも居場所がないであろう自分を見出すところで小説は終わる。彼には単純明快な政治的主張がない。それ故当時の政治の荒波の中では定位できず魂は漂泊することになる。作者はそういう青年の存在を何故描こうとしたのかと、ソウルの雑踏を眺めながらぼんやり考えていた。

隣国の歴史に対する無知を恥じつつ、「南進」時代の遷都先にある世界遺産水原城、ソウルの街中の景福宮離宮昌徳宮などの見学コースを踏破、壮大な建造物見学に歩き疲れ、観光客の定番、海鮮鍋に舌鼓を打った。そして最終日の昼食参鶏湯は、行列のできる庶民の食堂でいただいた。食してはならぬナツメや栗まで胃袋に納めた味音痴の私にも絶品であることは分かった。

観光客としての旅程をこなした3日間であったが、「広場」の主人公が恋人と登った南山に登り、カフェで時を過ごした街を歩いたことで、当時の苛烈な状況に翻弄されつつ居場所を求めた青年が眺めた風景を、幾分かは想像しやすくしてくれた旅でもあった。

母校だより

―第六十回一高祭―
一高祭を終えて

一高祭実行委員長　長谷川　莉代

六月二日・三日に第六十回一高祭が開催され、無事に二日間を切り抜けることができました。ご協力してくださった先生や父兄の方々に御礼を申し上げたいと思います。もちろん尽力してくれた実行委員や、放課後の時間を割いてくれた一般生徒にも、とても感謝しています。

今年も一高生が知恵を出し合い協力して、素晴らしい一高祭にすることができました。学業だけでなくこういった場面でも能力を発揮できるのが、一高生のすごいところだと思います。クラス企画の企画書を見たときは、他の高校の人に自慢したいくらいでした。

一高祭が終わった後、たくさんの仲間と一緒に泣きました。私にとって、それは達成感もありましたが、むしろ後悔からの涙でした。あちこちで不満の声を耳にしたし、自分が至らないために迷惑はかけてしまうし、後日にとったアンケートでも辛辣なコメントが多くて、自分がもっとしっかりしていればと、うなだれるばかりでした。

しかし、実行委員をやったことは後悔していません。いろんな人と出会えたし、酸いも甘いもまとめて多くの経験を積むことができたので、少し成長できたと思います。やり残したことはノートにまとめて次の実行委員長に託すことにしました。先輩が残した、いいところや反省点を後輩が引き継ぎ、一高祭はよりよいものになっていくのだと信じています。これからも伝統ある一高祭がますます向上されていくことを心から願っています。

余談ですが、一高祭が終わってしばらくして、同じ委員会の仲間達から余った用紙で作った表彰状をもらいました。中身はただの功労賞ですが、表彰されてこんなにうれしいのは初めてでした。辛いこともいっぱいあったし、働き詰めでぼろぼろになったけれど、いい仲間ができて私は幸せ者だと思いました。

一高祭

一高オリンピックを終えて

一高オリンピック実行委員長　小沼　友美

一高オリンピック実行委員会が立ち上がったのは昨年六月の中旬のことで、これは昨年と比べると二週間ほど遅く、委員長としてずっと焦りながら仕事をしていたような気がする。実際に私は今まで代表として何かをまとめた経験は皆無で、準備の段階で苦しい思いをしたこともたびたびあった。おまけに、私は生粋の文化部なのでスポーツのルールもよく分からない。私に質問に来た皆さんにはたいへん迷惑をかけてしまったと思う。

しかし、委員の仲間たちはたいへん頼もしく、私はいつも支えられていたと思う。各部活動の代表者をはじめ、様々な仕事を進んで行ってくれた。

なんとか無事に準備を終えて迎えた当日は、前日の心配が嘘のような程気持ちのよい秋晴れだった。

今年は種目・ルールとも昨年とほぼ同じであったが、「応援賞」という新しい賞を作ってみた。その成果かどうかは分からないが、それぞれの種目会場では仲間への大きな声援と拍手が響き渡り、どのクラスも完全に一つの団結した集団になっていた。最後の学年リレーでは昨年同様三年生の先頭走者は仮装して走り、盛り上がりは最高潮になった。そしてひとりの怪我人も出ることなく、無事に一高オリンピックは終了した。

今回の一高オリンピックを通して私が強く感じたのは、仲間の大切さである。準備委員会で多くの仲間に助けられたこと、それぞれの種目会場で仲間に精一杯の声援を送っている様子を肌で感じたこと・・・これからも一高生のつながりをより強くしていくために、この行事がますます発展していくことを心から願っている。

一高オリンピック

「歩く会」を創り上げて

第39回歩く会実行委員長　山崎　理沙

六月の実行委員会の正式な発足から、本番十月までの四ケ月間は、長くて短い、密度の高い時間でした。

今年のコースは、私の中では霞ケ浦が一番の見所で、夏の下見で初めて歩いたとき（土浦市在住ですが、霞ケ浦大橋や湖畔を歩いたのは初めてでした）、広い湖やその向こう側に見える山を見渡して、こんなコースを歩いてもらえる、ぜひ楽しんでほしい、と思いました。暑い時季の下見は確かに大変でしたし、他にも各係ごとに、また委員長としても、歩く会開催のため、特に最後の二週間くらい（テストもはさんだので尚更）はとても忙しい中で仕事を進めました。前日・当日も、それぞれの仕事をこなしました。そしてその成果が十月十二日には出せたと思います。

さて、振り返ればいろいろなことが思い出されますが、私自身についていえば、実行委員の皆と先生方に助けられてばかりの委員長でした。自分を不甲斐なく感じることが何度もありましたが、周りの人たちに助けてもらいつつ、歩く会を創り上げる力の一つとなれたのは、とても嬉しいことでした。この紙面を借りて、一言お礼を述べたいと思います。

呼びかけに応じて集まってくれ、一緒に動いてくれた委員の皆さん、いろいろな面でお世話になってばかりだった先生方、本当にありがとうございました。

今年の委員会では、昨年度初めて取り入れられた委員会Tシャツをまた取り入れました。また、携帯電話のメーリングリストによる当日の状況なども昨年同様取り入れました。看板係と受係の連携による、距離の表示は、昨年のアンケートでの意見から導入したものです。

「歩く会」という行事を、そんな風に、良い点は残し、悪い点は改善して、この先も引き継いでいって欲しいと思います。

歩く会

職員室だより

英語科職員室から

加納満夫

「あなたは英語が話せますか。」この質問に対して一体どれくらいの日本人が「はい」と自信を持って答えられるであろうか。ある調査によると、自分は英語が話せると考えている日本人は一割にも満たなく、また国際機関による語学力評価では、日本人の英語力は六十カ国中最下位であった。これが「あなたはパソコンが使えますか。」という質問であったら、「ある程度は」という回答も含めて過半数以上の手が挙がることであろう。一体我々は、パソコンを学ぶ時間の何倍もの貴重な時間を英語学習に注いできたのであろうか。

英語教育の改善の必要性が言われてから久しい。指導要領でも実践的英語運用能力の育成に重点が置かれてきているが、いざ目の前の大学受験問題に目を通すと、依然読解訳読問題が主である。我々英語教師は社会で求められる英語力と大学から要求される受験英語力とのギャップに絶えず悩まされている。生徒達に英語を話させる授業ばかりでは、難解な入試問題に太刀打ちできないであろうし、かといって今まで通りの訳読中心の授業では、語学力のないと言われる現状から抜け出せない。ある学校では外国人教師との授業を増やして運用能力を伸ばす試みの反面で、受験英語力は塾などで学んでいるという問題が出てきている。学校現場でどのような英語教育に重点を置くかは難しい問題である。

難しいからこそやり甲斐も感じている。大学受験問題を念頭に入れながらも、英語を話すことにも重点を置いた授業は今日も続く。難解な和訳を考えている時の生徒の表情は真剣で、英語を話している時の表情は幸せそうである。そのどちらの時間も大切にしていきたい。そしてそのためには私自身も生徒達と共にどちらの英語力も伸ばしていかねばならない。何歳になっても「一番英語力のあるのは今です。」と言えるように。

ところで、十数年前のことだが、大学に合格した男の卒業生は、初めての外国人の授業を受けて自分の英会話力のなさに愕然とした。受験のために学んできた英語力にかなり自信を持っていたのだが、その時彼は今までの努力の無力さを嘆き、英語の先生を恨むような気持ちも生まれた。そんな彼みたいな人を作らないためにも、英語教師は責任を持って務めを果たしていかなければならないであろう。「私は英語が話せます。」という教え子達の姿を夢見て。

部活動だより

剣道部

二年　福田純平

私たち剣道部は三年生十二名、二年生四名、一年生十四名、マネージャー五名の計三十五名の部員から成る仲の良い部活です。顧問の小松崎先生をはじめ、地域の先生方やOBの先輩方にご指導を頂きながら、よい雰囲気で稽古をしています。

今年度、三年生の先輩は男女とも県大会ベスト16という成績を残して6月に引退しました。新チームになった当初は、自分自身上級生として剣道部を引っ張っていけるか不安でしたが、夏合宿などのつらい練習を乗り越えて、私たち一人ひとりが少しずつ逞しくなり、部員の結束も堅くなってきたと思います。

私たちは多くの剣道強豪校とは違い、勉強と剣道を両立させなければなりません。これは非常にたいへんなことですが、先輩方が積み重ねてくれた土浦一高剣道部の長い伝統が私たちを励ましてくれます。先日は全日本東西対抗剣道大会の観戦に行き、本校で長くご指導されていた水田重則先生の試合に深い感銘を受けました。また、東京大学をはじめ大学で剣道を続けている先輩も多く、文武両道を今も実践する先輩方の姿勢と、創部以来OBの先輩方が私たちに残してくれた足跡が、私たちの大きな心の支えとなっています。

剣道には勝敗がありますが、それが剣道のすべてではありません。礼儀作法や周囲への気配りなど、勝ち負け以上に大切なことがあります。私たちはそのような基本的なことと、「土浦一高剣道部の和」を大切にして、関東大会出場を目標に一日一日の稽古を頑張っていきたいと思います。

囲碁部

二年　藤間幸一

先輩方が引退し、囲碁部は現在2年生7人、1年生10人が山田先生・小田先生のご指導のもと活動しています。今年、女子部員が3人になり、男女共に団体戦に出場できるようになりました。部員一同、今年以上の成績を残せるよう、毎日対局に励んでいます。

今夏の選手権大会で、囲碁部は全国7位という記録を残しました。もちろんこの結果は努力の成果でもあると思うのですが、先生方のご指導や、皆様の応援無しには、成し遂げ得なかったことだと思っています。特に、大会中の移動や宿泊、食事などに、同窓会から遠征費という形でのご支援があったおかげで、大会本番で全力を出し切ることができました。

女子団体戦も、初出場ながら全国大会出場を果たしました。予選リーグ2勝1敗で惜しくも決勝トーナメント進出はなりませんでしたが、非常に意義深い大会になったと思います。

囲碁という競技、ややもすると、男子が暗い雰囲気でやっていると誤解されがちですが、男女ともに楽しく活動しています。よりよい部活になるよう、そしてできれば結果も伴えるよう、努力していきたいと思っています。

今年の初めから、囲碁部のホームページを開設しました。囲碁部の大会予定や結果を掲載しているほか、不定期でブログの更新を行っています。よかったら一度ご覧になっていただければ幸いです。

(http://1st.geocities.jp/tsutiura1igo/)

弦楽部

二年　沼田絢香

私たち弦楽部は男子4人女子10人の計14人で日々活動しています。私たちの代で五代目という事でまだまだ歴史は浅いですが、これまで二回の全国高等学校総合文化祭への出場を果たしています。

活動場所として、旧本館をお借りしています。これ以上ないほどの音響や窓から四季折々の姿をのぞかせる大きな桜の木は私たちの意欲をかき立てます。また、旧本館一般公開日に合わせ、ミニコンサートという場を設けさせていただいています。本当に沢山の人々の暖かい支えの上に私たち一高弦楽部は成り立っているのです。

年間を通した活動ですが、県南芸術祭、県芸術祭、そして全国高総文祭への出場をもっとも大きな目標として据えています。これらの大会のために、毎年1つ、大曲を何ヶ月もかけて仕上げるのです。それに加えて一高祭やミニコンサートでは「お花見」や「クリスマス」と銘を打ち季節に合わせた曲を取り入れたり、様々なジャンルの曲を演奏しています。そして3月には大ホールをお借りして毎年恒例となった「スプリングコンサート」を開催しています。これらのような人前で演奏できる機会はとても貴重であり、更なるレベルアップのための良きステップとなります。もしお時間がございましたら一度足を運んでいただければ幸いです。

最高の環境と仲間達に囲まれて、今日も一高弦楽部は更なる飛躍を目指して頑張ります。

平成十九年度入試報告

東大合格公立校現役一位

文武両道で志望大合格果たす

進路指導部長　門井　了

平成十九年度入試は、受験生の集中する大学とそうでない大学の二極化がさらに進行しました。また、後期日程廃止、それに伴うＡＯ・推薦入試の拡大、センター理科３科目を課す大学の増加の中で行われました。

センター試験は、教育課程の変わり目ということで昨年度は大幅に易化しましたが、本年度は例年並みの平均点に落ち着きました。本校生の平均点は９００点満点で、文系（６教科７科目）が６８１・０点（昨年７２４・５点）、理系（５教科７科目）が６９０・０点（昨年７３６・４点）と、昨年度に比べて大幅にダウンしました。しかし、全国的にみて上位層は平均点の落ち込みには関係なく高得点をマーク、超難関といわれる大学では厳しい入試が展開されました。

国立難関大及び医学部医学科志向に変動はありませんでした。新卒生に限ると、北大、東北大、東大、東工大、一橋大、大阪大、京都大、それに地元筑波大と国立大医学科の実受験者数は２３９名で、これは国立大実受験者総数の８８・８％にあたります。合格者は８８名で、国立大合格者１２３名の７１・５％になっています。

新卒・既卒合わせた国公立大合格者数は１９３名（昨年１８９名）でしたが、東大２８名（昨年21名）と地元筑波大51名（昨年39名）で大きく躍進しました。東大は全国公立校現役トップ、筑波大は全国で現役、総数ともトップでした。

その他の主な国立大学を前年度と比較してみると、合格者を増やしたのは、茨城大11名（プラス２名）、東工大８名（同３）、一橋大６名（同２）、横浜国大は昨年合格者がいませんでしたが、４名の合格者を出しました。逆に減らしたのが、北海道大４名（マイナス４名）、東北大19名（同３）、千葉大11名（同６）、東京外語大３名（同１）、京都大３名（同１）、大阪大１名（同６）となっています。新卒生が合格した国立大学数は５年連続25大学でした。公立大では、７名が合格（前年比マイナス５名）、地元県立医療大の合格者は１名でした。

医学部は、国立大学医学部医学科に限定すると、13名（昨年21名）が合格、新卒生では延べ50名（昨年43名）が受験し、筑波大に２名、秋田大、山形大、信州大、宮崎大、山梨大、徳島大の各大学に１名ずつ、計８名（昨年10名）が合格しました。

私立大の総受験者数（新卒生・過年度卒生の延べ合計数）は１４５９名（昨年１３１２名）、合格者数は６８４名（昨年６７１名）、新卒生に限ると、受験者数が９８８名（昨年８７１名）、合格者数では58名増の３９３名でした。センター受験での合格者が増加、東京理科大（１１０名）と早稲田大（１２１名）で三桁の大台に乗せました。

新卒生の進学率は67・７％（昨年57・５％）でした。私立大への進学者が96名（昨年71名）と増えたことが特徴的です。

本校は受験に特化したカリキュラムをとらず、文武両道を奨励しております。多感な時期、小さく凝り固まらず、様々な体験を通して大きく成長し、そして、やがて、世界に羽ばたいていってくれることを期待してやみません。

平成19年度入試合格状況

国公立大学

大学	合格者	新卒
北海道大	4	1
弘前大	1	
岩手大	1	
東北大	19	14
秋田大	2	1
山形大	2	2
茨城大	11	10
筑波大	51	38
群馬大	1	
埼玉大	1	1
千葉大	11	6
お茶の水大	6	5
東京大	28	19
東京医歯大	1	1
東京外語大	3	3
東京学芸大	3	2
東工大	8	4
東京農工大	2	1
一橋大	6	3
横浜国大	4	1
新潟大	1	
山梨大	1	1

大学	合格者	新卒
信州大	6	4
静岡大	1	1
名古屋大	2	1
京都大	3	
大阪大	1	1
神戸大	1	1
徳島大	1	1
九州大	2	
宮崎大	1	1
琉球大	1	
国立大計	186	123
（医学科）	（13）	（8）
県立医療大	1	
群馬県立女子大	1	1
首都大東京	3	2
横浜市立大	1	1
大阪府立大	1	
公立大計	7	4
国公立大計	193	127
防衛大	3	2
大学校計	3	2

私立大学

大学	合格者	新卒
青山学院大	21	18
学習院大	8	6
慶応大	68	40
国際基督大	7	6
上智大	30	18
中央大	32	13
津田塾大	15	13
東京女子大	15	10
日本女子大	11	9
東京理科大	110	39
明治大	68	44
立教大	37	24
早稲田大	121	72
法政大	18	9
北里大	13	8
芝浦工大	6	3
日本大	9	4
同志社大	1	0
立命館大	1	1
産業医大	1	0
その他	92	56
私立大計	684	393
合格者総数	880	522

平成18年度　進修同窓会決算書

収入額　一金　15,164,758円也
支出額　一金　11,952,546円也
差引残高　一金　3,212,212円也（平成19年度へ繰越）

【収入】　単位：円

	項目	予算額	決算額	比較増減(△)	備考
1	繰越金	2,422,954	2,422,954	0	前年度繰越金
2	終身会費	100,000	210,000	110,000	7名
3	年会費	9,000,000	10,349,000	1,349,000	3,175名他
4	入会金	1,775,000	1,745,000	△30,000	新会員　計349名×5,000円
5	寄付金	0	437,051	437,051	下記のとおり
6	雑収入	46	753	707	預金利息
	合計	13,298,000	15,164,758	1,866,758	
	ご寄付者名	高8回卒業生ご一同様、高普33回理10回卒業生ご一同様、中43回卒植木和男様、中39回卒平田孝善様奥方様、高17回卒小山行雄様（進修同窓会日立支部より）			

【支出】

	項目	予算額	決算額	残額	備考
1	総会補助	800,000	805,559	△5,559	総会資料、会場設営等
2	会報発行費	3,500,000	3,215,625	284,375	会報印刷、発送
3	通信費	100,000	85,854	14,146	切手、はがき
4	卒業記念品費	150,000	141,200	8,800	卒業証書用丸筒
5	卒業60, 50, 40, 25周年記念品費	400,000	400,000	0	卒業周年記念品
6	会議費	200,000	204,261	△4,261	役員会、評議員会等経費
7	支部連絡費	300,000	200,000	100,000	支部会補助
8	生徒奨励費	2,000,000	1,730,207	269,793	生徒会補助
9	生徒活動補助費	2,000,000	2,000,000	0	野球場夜間照明
10	別途積立金	1,000,000	1,000,000	0	別途積立金会計へ
11	慶弔費	100,000	0	100,000	
12	事務局費	900,000	741,684	158,316	担当者手当、郵便振替手数料等
13	旧本館活用事業費	1,240,000	1,140,706	99,294	事務用品、展示架・保管庫等
14	予備費	608,000	287,450	320,550	資料展示用ショーケース
	合計	13,298,000	11,952,546	1,345,454	

上記のとおり決算しました。
平成19年３月31日
茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長　幡谷　祐一

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。
平成19年３月31日
監事　梅澤　正之進　印
監事　田嶋　栄吉　印

平成19年度　進修同窓会予算書

収入額　一金　14,062,300円也
支出額　一金　14,062,300円也
差引残高　一金　0円也

【収入】　単位：円

	項目	予算額	前年度予算額	比較増減(△)	備考
1	繰越金	3,212,212	2,422,954	789,258	前年度繰越金
2	終身会費	100,000	100,000	0	
3	年会費	9,000,000	9,000,000	0	
4	入会金	1,750,000	1,775,000	△25,000	350名(全320・定30)×5,000円
5	雑収入	88	46	42	預金利息
	合計	14,062,300	13,298,000	764,300	

【支出】

	項目	予算額	前年度予算額	比較増減(△)	備考
1	総会補助	850,000	800,000	50,000	資料、会場設営等
2	会報発行費	3,500,000	3,500,000	0	会報印刷、送料
3	通信費	100,000	100,000	0	切手、はがき等
4	卒業記念品費	150,000	150,000	0	卒業証書用筒
5	卒業60, 50, 40, 25周年記念品費	400,000	400,000	0	卒業周年記念品
6	会議費	200,000	200,000	0	役員会、評議員会等経費
7	支部連絡費	300,000	300,000	0	支部会補助
8	生徒奨励費	2,000,000	2,000,000	0	生徒会補助、進路指導助成
9	生徒活動補助費	2,000,000	2,000,000	0	部活動利用設備購入
10	別途積立金	1,000,000	1,000,000	0	積立金会計へ
11	慶弔費	100,000	100,000	0	
12	事務局費	900,000	900,000	0	担当者手当、郵便振替手数料等
13	旧本館活用事業費	1,920,000	1,240,000	680,000	
14	予備費	642,300	608,000	34,300	
	合計	14,062,300	13,298,000	764,300	

※項目間の流用を認める。

会員名簿の発刊に当って

昨年の会報でお知らせ致しましたが、進修同窓会創立一一〇周年記念会員名簿が八月三日に予定通り発刊されました。名簿の購入予約または広告の申し込みをされた会員には、すでに会員名簿が送付されていますので、ご確認ください。

今回の発刊に当っては、個人情報保護法の施行による制約と平成の市町村大合併があり、これまでにない難しい状況でした。しかし会員の皆様のご理解と株式会社サラトの適切な対応により、住所の搭載率が幾分減少したものの、目標とした八〇％超で発刊することができました。

また広告につきましては、一般の広告は前回より申し込み件数がやゝ減少いたしましたが、今回初めて取り入れましたご氏名のみを掲載する賛助金の申込み数が四〇〇件を越え、全体として目標額の五〇〇万円をかなりオーバーする状況になっています。皆様のご協力に心から感謝申し上げます。

申し上げるまでもないことですが、会員名簿は同窓会活動の生命線であります。今後も会員各位のご理解・ご協力をお願い致しますと共に、会員名簿の適切な取り扱いについてご配慮をお願い致します。

土浦一高
電　話　〇二九-八二二-〇一三七
FAX　〇二九-八二六-三五二二
ホームページアドレス
http://www.tsuchiura1-h.ed.jp

会費納入のご協力とお願い

平成十八年度の会費納入状況は、平成十九年三月末現在、三、一七五名の皆様から、一〇、三四九、〇〇〇円を頂きました。

今年度も納入して頂きたく、振替用紙を同封いたしました。会費は同窓会事業費に充てられますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

編集後記

旧本館活用委員会の他県文化財校舎などの視察旅行は、例年、日帰りで行ってきましたが、今年は東北地方に足を延ばし一泊二日で実施しました。7月28日、宮城県登米市の旧登米尋常小学校校舎（国の重文に指定され教育資料館として公開）、旧水沢県庁舎を見学し、翌29日には山形県を訪れ、山形県立博物館の教育資料館として公開されている旧山形師範校舎や文翔館（旧県庁舎）・山形市郷土館となっている旧済生館本館、米沢市の旧米沢工専校舎などいずれも国の重文に指定されている建物を見て回りました。どの建物も大切に保管されているばかりでなく、資料館などとして活用されていました。大いに参考になった二日間でした。なお、今回も多くの同窓会役員の方々に参加していただき、本校旧本館の今後のあり方などで思いを共有することができました。

本号のために多方面から多大なご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。今後とも進修同窓会をよろしくお願い申し上げます。

◇◇◇

進修同窓会会報第64号
発行日　平成十九年十二月一日
会報編集委員会
編集委員長　青山和義
編集委員　木島幸夫　上木幹夫　飯村弘　片岡博　谷中良雄　古徳尚一　堀越博　鈴木志郎　宇田川仁一郎　池田憲彦　鈴木淳一
校内　松延和典　杉田幸雄